

Title	新美寛氏の追憶
Author(s)	鈴木, 隆一
Citation	懐徳. 1965, 36, p. 14-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90407
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

新美寛氏の追憶

鈴木隆 一

學業半にして斃れたため、世に知られることが少かつたと思われ、先ず故人の略歴を申し上げると、新美氏は昭和七年に京都大學文學部哲學科で中國哲學史を専攻し、業を畢えるとともに、人文科學研究所の前身たる東方文化研究所に奉職した。ここで「本邦に残存した資料による輯佚」という題目によつて、輯佚書の編纂に従事することになり、これが一生の事業となつたのである。昭和十二年十月に應召して南支方面に派遣されたが、この出征について私の印象に残っていることは、當時の所長であつた狩野先生が、いたく同君の身につけて配慮されたことである。研究所としては初めて出征者を出したと、前途ある青年に萬一のことがあつてはとの懸念からであらうと思う。五年間の従軍を終えて、昭和十七年一月に無事歸還すると、再び以前の編纂の事業に取組むことになつた。かたわら懷徳堂の講師をも兼ね、再應召の時まで續く。昭和十九年八月、再び應召の命が下つたが、戦局は香しくない状態であつた。二度目のこととて、別れに臨んでも落付いて、自分のような老兵は多分、内地の留守部隊になるであらうと語つていたが、それが沖繩方面に配置されるに至るとは思いも及ばぬことであつた。後からの公報によれば昭和二十年六月二十日戦死ということになつてゐる。場所は沖繩南端の魔文仁。享年四十歳。實に惜しい人を失つたものである。

故人は學問を心から愛した。これは同君に限つたことでなく、凡そこの道に志す人はいずれもそうであらう、が故人は特にこの念が強かつたようである。南支に出征中、戦地からの通信には、明からさまに書ける事柄ではな

いが、言葉の端に研究の未完成を懸念している様が讀み取れた。これもその好學心の一端を示すものである。

故人の研究態度は實證を重んじた。これは當時、京都に於ける支那學の學風でもあつたが、同時に故人の人物が着實であり、思考力が緻密であることも、この方法を受入れるのに適していたと思う。實證的方法は既に清朝の考證學者がこれを用い、立派な業績を残しているのであるが、故人の目的はここにあつたのではなく、中國古代の歴史を社會學的に研究しようというのである。そのためフランスの社會學を随分勉強した。これには故人の恩師たる小島先生の學風からの影響も大きい。本務のかたわらに起草した數ある論文の中で、支那學誌上に發表した「魯の亳社に就いて」(昭和十一年)、「夷伯の廟について」(昭和十七年)、「初獻六羽について」(昭和二十二年遺稿)などの一連の祭祀儀禮關係の研究は、古代社會の特徴たる宗教的性格に注目し、そこから古代史の實體を明かにしようという試みであつた。一作ごとに分析の精緻と論證の正確さを加えて、古代史についての見識の完成も近くにあるやを思はずものがある。

故人の一生の事業であつた輯佚書の編纂について説明すれば、これは現在亡びてしまつた古書の復原である。この研究は早くから中國本土において行われ、殊に考證學の盛んな清朝に入つて格別の發達を見、そのため大部な輯佚書が刊行されるに至つた。佚書ということになれば、我が國もまたその寶庫である。平安朝から傳來されてきた鈔本や刊本の中には、彼の國で既に亡びた書物もあり、或はその佚文を引用したものなど、いずれも輯佚にとつて貴重な資料である。これに注目して、この事業を計畫したのは故人の指導員たる小島先生であり、編纂は故人がこれに當つた。底本は、彼我兩國の撰述に係る典籍二十八種を選び、ここから必要事項を鈔録し、最初は故人が單獨で、中間に若き日の西田太一郎博士の協力を得て、第一回の應召までに全部の鈔録を終えたようである。そのカード數は大凡十萬枚にも達した。歸還後は専ら整理に着手したのであつたが、緒にただけで、再應召のために中絶に終つたのである。採用した底本の中には既に中國の學者に利用されたものもあるが、ただ引用に少し杜撰なところがある。これ

は鈔録に際しての見落しか、或は依據した底本が悪かつたからであろう。試みに極く一部分をとつて比較してみても、故人の仕事の優れていることがはつきり判るのであるから、全體について見るならば、既刊の輯佚書を補うところが多いのではないかと思う。故人の没後、既に二十年を経過した。その間、整理再開の企てが無かつたわけではないが、何分尠大な原稿であり、完成には相當の年月を要するところから後繼者を得ず、そのままになつてゐるのが實情である。これは學界にとつて一つの損失であるとともに、故人の靈に對してもすまぬことである。

故人は溫厚にして思慮深く、且つ度量の廣い人柄であつた。私との長い交際の間、未だかつて怒つた様子を見たことがない。若くして二十數貫の堂々たる體軀を持ち、實に大人の風格があつた。平常、和服を着用していたが、その體重のためによく履物を損することがあり、砂利道を行く時には要心深く歩く様子の可笑しかつたことを思い出す。大きな體に係わらず器用であり、趣味も亦廣かつた。無趣味な私は、當時必しも感服しなかつたが、追々歳をとるに隨つて少しこの風流が判るような氣がして、轉た敬慕の念に堪えないものがある。